

科目名	地球環境学	科目分類	■ 専門科目群 □ 総合科目群		
			経済学科	□ 必修 ■ 選択	
			学科	□ 必修 □ 選択	
英文表記	Environmental Sociology	開講年次	■ 1 年 □ 2 年 □ 3 年 □ 4 年		
		開講期間	■ 前期 □ 後期 □ 通年 □ 集中		
ふりがな	むらなか たかし	実務家教員担当科目		修得単位	2 単位
担当者名	村中 孝司	実施方法	■ 対面のみ □ 遠隔のみ □ 対面・遠隔併用		
授業のテーマ	地球規模の環境問題から、地域社会における環境問題まで、さまざまなスケールでの環境問題について学習する。また、環境と経済・社会との両立を、持続可能な発展に注目して理解する。				
到達目標	① 地球環境と人間社会の関係を対峙するものとみなすか、共生すべきものとみなすか考え、持続可能な社会の構築のために必要な知識と考え方の定着を目指す。 ② 自然環境の社会科学的価値を検討し、環境開発行為、生物多様性の損失などによる問題点の定量化を試みる。日本が抱える食やエネルギーの問題を理解し、地球環境問題の視点に立って、これからの日本社会のあり方を考える。				
授業概要	① 地球環境問題の実例を取り上げ、生態系や人間社会への影響、予測、対策を学ぶ。また、数多くとりあげられている地球間問題の関係とフィードバックループについて学ぶ。 ② 環境と経済の両立、環境価値の評価方法について論じる。 ③ 資源、エネルギー、食料問題について述べる。				
授業計画					
第 1 回	ガイダンス 環境問題とは何か、循環型社会とは何か				
第 2 回	公害と環境問題の歴史 産業革命と工業化、公害、大気、水、土壌				
第 3 回	地球温暖化 地球温暖化の原因と影響、フィードバックループ				
第 4 回	オゾン層破壊 オゾン層の生成と消失、フロン類、人体や自然界への影響				
第 5 回	大気汚染と酸性雨 酸性雨の原因と影響				
第 6 回	水質汚濁と化学物質汚染 富栄養化、農薬・除草剤、重金属類、海洋汚染、生物濃縮				
第 7 回	砂漠化と森林破壊 農業形態のあり方の変化による土地の劣化、過放牧、過耕作				
第 8 回	自然保護に関する制度、生物多様性 生物多様性とは何か、生物多様性の階層				
第 9 回	生物多様性を脅かす 3 つの要因① 開発・乱獲、分断・孤立化、管理放棄				
第 10 回	生物多様性を脅かす 3 つの要因② 外来生物の侵入による影響、生態系サービス				
第 11 回	生態系の保護と保全 里山・里海				
第 12 回	環境の修復と環境アセスメント 回避・低減・代償、アセスメントの実態、緑化				
第 13 回	環境価値の評価 環境の経済的価値				
第 14 回	エネルギー問題 3R とゴミ問題、ライフサイクルアセスメント				
第 15 回	世界人口と食料問題 食料問題と環境負荷、フードマイレージ				
第 16 回	定期試験				
授業時間外の学習	地球環境問題や環境評価について、常に目を光らせておくこと。新聞やニュースなどから、知識を入手しておくこと（約 3 時間）。				
履修条件 受講のルール	この講義は、自然科学概論Ⅰ・Ⅱの知識や考えが土台となっている。したがって、この 2 つの科目を同時に履修する、もしくは事前に履修していることを推奨する。 授業には筆記具は必須である。教科書のほか、ノート（ルーズリーフ可）を必ず持参すること。なお、授業中にパソコンの使用を指示する場合がある。 また、小テストやレポート、参考書などに関する情報はすべてポータルサイトで周知する。必ず確認すること。				

テキスト	講義中に紹介する。
参考文献・資料	植田和弘・大塚直『新訂 環境と社会』放送大学教材
成績評価の方法	試験（70%）、レポート・課題提出・小テスト（30%） 上記評価項目を基にして総合的に判断します。 ・出席回数が規定に満たない場合及び授業料その他納入金等の全額を納めていない場合は、試験を受けることができません。 ・出席確認時に不在だった場合は原則としてその回は欠席とします。 ・授業中に無許可で退出した場合は欠席とします。 ・授業の理解、および予習復習が充分であることを確認するため、授業中に小テストを行います。 ・レポート課題は授業内又はポータルサイトで指示します。 ・第1回、第2回をいずれも欠席した学生の受講を認めない。
オフィスアワー	火曜 14:40～16:10、水曜 14:40～16:10
成績評価基準	秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69～60点)、不可(59点以下)
実務経験及び実務を活かした授業内容	
学生へのメッセージ	経済発展最優先で進んできた日本、今でもなお経済発展が優先され、地球環境問題が焦点になることは多くありません。我々人間が安全、安心に生活していくためにはなにか必要でしょうか。高度の科学と技術でしょうか、福祉などの支援策でしょうか。それらの土台には「地球」という一つの宇宙船があり、その中からしか資源を取り出すことができないこと、そしてその資源は、使い方によってはどんどん減っていくことを忘れてはいけません。地球や生態系から得られる恵み、調整機能、文化、それらを我々は知らず知らずのうちに享受し、豊かな生活を送っているのです。